

女子部中等科2年 読書

「『青い鳥』を読む」に学ぶ

内藤優子

中等科2年の読書の授業では、毎年『羽仁もと子著作集第十三巻 若き姉妹に寄す』を読み学んでいる。学業報告会の勉強として取り上げた「『青い鳥』を読む」は、メーテル・リンク作『青い鳥』の作品に沿って羽仁もと子先生が寓意を解説しながら、人間の持つ性質や幸福について考察していくという文章である。

本文の内容に沿って家族ごとに章を受け持ち、そこから学びえたことをまとめ、発表のための表や絵図を作成し、口頭での発表を行った。

I. はじめに

女子部中等科の読書では羽仁もと子著作集から1年で『子供読本』、2年で『若き姉妹に寄す』、3年で『友への手紙』からの学びと、他の数冊の書籍からの学びを行っている。中等科2年という段階は自己や他者への考察が深まり、自分とはどのような者か、なぜ生きるのか、など根源的な問いを深める時である。その時期に「幸福とはどのようなものか」という問いに向き合う経験をする、というのがこの学習の目的である。『青い鳥』は1911年にメーテルリンクにノーベル文学賞をもたらした作品で、日本での初演は1920年、その直後に羽仁先生が少女たちに向けて幸福を考える題材として書き下ろされたのが「『青い鳥』を読む」である。象徴主義のメーテルリンクの人間観、人生観と羽仁先生のお考えは必ずしも一致しない部分もあるが、今回の学びはあくまでも羽仁先生の人生観、人間観に学ぶことを中心にした。通常は3学期に行う学習であるが、今年度は学業報告会の特別勉強として2学期に繰り上げて学習した。

II. 報告会までの学習

1学期は『若き姉妹に寄す』の中から「よい生活と勉強のために」を学び、その中の「自分のきらいな人にも親切をしなければならないでしょうか」では副教材として渡辺和子著「ピーマンと私」(『忘れかけていた大切なこと』より)を読んだ。

1学期は以上の教材から勉強の取り組み方、よい生活とは何か、友だち関係の中にある問題を考え

ることが主な内容であった。夏休みには「『青い鳥』を読む」の学習にむけて各自、今考える「幸福とはどのようなものか」を作文に書き、読める人は『青い鳥』の原文を読んでくる宿題を出した。2学期前半の5回の授業でひと通り「『青い鳥』を読む」を読み、概要を理解した。この学習では羽仁もと子先生がどのような人間観で書かれているかを読み取ることを主題とした。

III. 報告会への準備

「『青い鳥』を読む」は、メーテルリンク作『青い鳥』の章立てに従って次のような章で構成されている。

- 1 きこりの家
- 2 妖女の御殿
- 3 思い出の国
- 4 夜の宮
- 5 森
- 6・7 墓場
- 8 美しい雲を描いた幕の前
- 9 幸福の園
- 10 未来の王国
- 11 わかれ
- 12 目ざめ

中等科2年は学業報告会で発表するのが初めてであったので、家族で協力して一つのテーマを取り上げるという方針をクラスに伝え、どのように準備して発表するかについてクラスで相談して決定した。

6家族あるので、5家族はいずれかの章をテーマにする、1家族は『青い鳥』という作品についてまとめるということになり、以下ようになった。
(報告の順番に記す)

- A家族 『青い鳥』とメーテルリンクについて
- F家族 妖女の御殿—登場する妖精の持つ性質について—
- E家族 きこりの家—チルチルとミチルの性質や家庭環境について—
- C家族 夜の宮
- B家族 幸福の園
- D家族 未来の王国
- E家族 目ざめ

最後の「目ざめ」は報告がほぼ出来上がってから最後のまとめとして、きこりの家にもどったチルチル、ミチルが見えるようになったもの、ということによって報告に入れたほうがよいということになって、加わったものである。

羽仁もと子先生が、人間がいろいろに動く感情や性質を統制しながら、真の幸福を探す人生の旅を続けるという意味を考えさせようとしている点に気づくというのが、報告会の準備段階での学びの中心であった。

C家族の取り上げた「夜の宮」では人間と未知なる物の関係を、B家族の「幸福の園」では、欲望を満たす幸福、与えられたものから見出す豊かな幸福、他の人を幸せにする大きな幸福という階層の違う幸福があることに気づくこと、D家族の「未来の王国」では人間がこの世に生を受けて生まれてくる意味に気づく、という意味もふくまれていた。

発表がひと通りまとまった段階で、学習を振り返りながら改めて幸福について考えること、感想を文章にまとめて各自のまとめとした。

IV. 報告会の内容

Ⅲで述べた順番で報告を行った。ステージの背景として『青い鳥』を読むというテーマを表す大きな合作の絵を掲げ、各報告では妖精の意味す

る人間の性質を表す図や場面を表す絵を用いた。

全体の報告の流れとしては、貧しいきこりの家に生まれたチルチルとミチルが妖精たちとの旅を通して自分達の幸福に気づき、他の人にも幸福を分け与えたいという心持ちに変化していく過程から、羽仁先生の解説を通して気づいたこと、学んだことを発表するという流れになった。

展示では幸福について書いた文章のいくつかを紹介し、絵の雛型を展示した。

V. 報告会を終えて

報告会直前に各自が書いたまとめの作文から3人の文章を紹介する。

☆ 私が今回の「『青い鳥』を読む」の授業で学んだのは、自分が「未来の王国」の担当でもあったので、「命」についてです。未来の王国の子どもたちは生まれてくるときに何かを持っていかなければならないと、著作集に書いてあります。それは犯罪や病気、自分が発明するものなど様々でした。なぜ犯罪や病気などの苦しみを持ってくるのか私にはわかりませんでした。この課題について考えることで、自分なりの考えを持つことができるようになりました。

楽しみや喜びなど幸せになるようなものを持ってきても、苦しみとは遠く離れてしまいます。誰もが幸せならそれでもよいとは思いますが。しかし、私達は、楽しさや苦しさなどの様々な経験を得るために生まれてきたのだと思います。報告会でも発表する予定ですが、生まれてくる意味を見つけるために人生があるのだと思いました。

☆ まずクラスの人の「幸せ」について知ることができました。普段「幸せ」について人の意見を聞くこともなく、自分で考えることもなかったので、とても多くのことを学べたと思います。自分の中の「幸せ」についての考えと他の人との意見を比べると、まったく違う意見があったり似ている意見があったりしました。他の全く違う意見を知って、これから「幸せ」について考えた時にこのような意見があったと思わせるなど思いました。

二つ目は文章構成についてです。今回読書とい

うことで内心すぐに原稿を書き終わって表作成に取りかかれると思っていたのですが、自分が読んだら気づかない所を友達が直してくれるということがありました。ミセス羽仁(羽仁もと子)の文章は独特な言い回しが多かったり、難しいところがあったので、なかなか文章が伝わるようになりませんでした。

最初はあまりやる気がなくどうなるか心配していましたが、やってみると表を書くのも楽しいし、文章を考えるのも楽しかったので良かったと思います。

☆ 私は最初、幸せとは何かと聞かれて「自分の欲求が満たされること」と答えました。自分の欲が全て満たされていれば、何も不自由がなくなり幸せになれる、そう思っていたからです。けれど、その欲を満たせる幸福は全てが肥った幸福でした。本当の幸福、大きな本当の喜びは身近なものや他人の為にする幸福だとミセス羽仁が書かれているのを読み、自分の幸せについての価値観が変わったような気がします。しかし、正直の性質を持つ犬がその肥った幸福たちのもとへ行くのを見て、やはり人間の正直な所は欲望に正直なのかも知れないなと思いました。

また、自分は猫の性質が一番近いのかもしれないと感じました。なぜなのかどうしてそう感じたのかよくわかりませんが、どうしても犬とは対象的な性格をしていると私は思います。むしろ、犬のような性質を持っている人の方が少ないのではないのでしょうか。大半の人は、猫のように自分が消えてしまわないように、嫌われないようにとしている風に私には見えました。しかし、そんな猫のような人に「本当の幸せ」と「本当の大きな喜び」は手に入らないのではないかと思います。なぜなら、猫は常におびえていたり、人のための行動を起こさないからです。ミセス羽仁も気の毒だと言っていたのはこの二つがあるからでしょう。それで私は猫ではなく理知を持った犬のような人になりたいと思いました。そして、周りにもそう思う人が増えてくれたらうれしいです。

以上はほんの一部であるが、他の人も報告会の学びを通して各自がこれまで考えたことのなかつ

た人間の性質や命について、また真の幸福とは何かということについていろいろな気づきを持ち、深く考えたことが伝わる文章を書くことができた。

全員の作文をクラスで共有してまとめとした。

VI. 終わりに

何年か中等科2年の読書の授業を続けてきて、羽仁もと子著作集『若き姉妹に寄す』のすべての文章が、十代の少女が真に楽しく幸福な人生を送れるよう願って書かれていることを強く感じるようになった。そのことを生徒と共に学び取れる授業になるよう今も努めている。

幸福とは何かというテーマは非常に重いものであるが、指導にあたって特に生徒自身が自らの発見や理解を深めていかれるよう留意した。

人間の性質についての考察も、物語の登場人物の解説として読めるからこそ、客観的に受けとめて深めることができる。羽仁もと子先生はその手法で『人間篇』の著作をも著されており、女子部高等科2年の後期にそれらを学んでいる。『人間篇』は、羽仁先生自らが「人間を科学する」というテーマで書かれた渾身の作と聞いているが、『『青い鳥』を読む』の学びが『人間篇』の学びにもつながっていくよう期待している。

VII. 参考文献

原作として生徒に薦めたのは以下の二作品である。

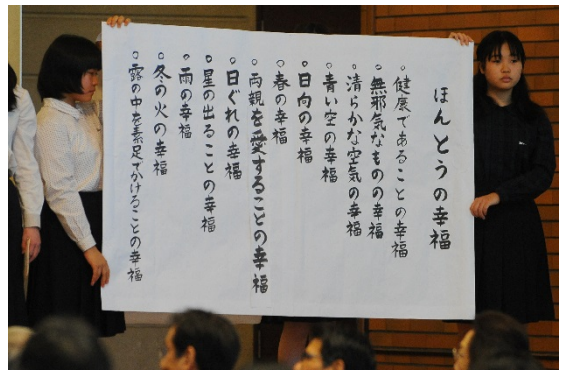
- ・『青い鳥』メーテルリンク作、堀口大學訳
新潮文庫
- ・『青い鳥』メーテルリンク作、末松氷海子訳
岩波少年文庫

羽仁もと子著作の『『青い鳥』を読む』の原文は楠山正雄訳、現在は絶版で言葉遣いがかなり古いものである。堀口大學訳も言葉遣いが古く、格調高いが中等科2年にはやや難しかったようだ。

末松氷海子訳は原文を忠実に訳しながらわかり易く注も付されており適当な1冊と思われる。



報告を通して背景に用いた合作の絵



B家族 「ほんとうの幸福」についてまとめた表



F家族 妖怪の性質についてまとめた図



B家族 「肥った幸福」についての図